

平成最後の〇〇〇

いよいよ平成時代の終わりが近づこうとしています。ここ半年は「平成最後の〇〇〇」というフレーズを聞かない日はないくらいです。平成最後の紅白歌合戦はサザンオールスターズの「勝手にシンドバッド」で盛り上がり良かったのですが、最近では「平成最後のバレンタインデー」や「平成最後のホワイトデー」など、商魂たくましく、昨年と何が変わったか分からないものまで、玉石混淆の感があります。

元号と言えば、最初に用いられた大化から平成まで 231 個あるとのことですが、覚えているのは、「大化の改新」の大化と慶応、明治、大正、昭和、平成くらいでしょうか。大化の改新は「虫殺(645)された蘇我入鹿」と語呂合わせで 645 年と覚えていましたが、調べてみると、今では 645 年はこの年の干支から「乙巳の変」と呼ばれ、その後、大化 2 年(646 年)1 月に改新の詔が發布されてからの一連の改革を大化の改新と呼ぶそうです。

歴史が変わると言えば、鎌倉幕府の成立も、私は「いい国(1192)つくろう鎌倉幕府」と覚えていましたが、これも子供たちに聞くと、「古いよ、今は朝廷から文治の勅許を得た 1185 年が鎌倉幕府の成立の年。」だそうです。また、日本最大の前方後円墳と言えば仁徳天皇陵古墳ですが、最近、百舌鳥・古市古墳群として今年のユネスコ世界文化遺産候補に決定したニュースが流れていましたが、これも現在は仁徳天皇陵古墳ではなく、大仙陵古墳と呼称されていました。昭和 63 年、昭和最後の卒業生にとっては、昭和は遠くなりにけり、ですね。

振り返ってみると、平成元年は出生率が 1.57 と昭和 41 年の丙午の 1.58 を下回る戦後最低を記録した、産婦人科医にとっては忘れられない

飄

々

広報委員

津永 長門

年でした。さらに、平成 17 年には過去最低である 1.26 まで落ち込み、近年は微増傾向が続いていましたが、平成 29 年は 1.43 と 2 年連続の低下です。出生数は、1971 年から 1974 年までの出生数 200 万人を超える第二次ベビーブームからずっと減少傾向で、それでも平成元年は 124 万 6,802 人の出生数でしたが、平成 28 年は統計の残る明治 32 年以降、初めて出生数が 100 万人を下回る結果(97 万 6,978 人)となり、平成 29 年の出生数も 2 年連続 100 万人割れ(94 万 6,065 人)で過去最少を更新しました。

出生率がほぼ横ばいなのに出生数が大きく減っているのは、母親となる女性の人口そのものが減っているためです。それが顕著なのは中国で、1979 年から 2015 年まで続いた一人っ子政策の弊害として、2016 年に政策が撤廃されても人口減に歯止めがかからず、急速な高齢化社会が進行しています。

人口を維持するには出生率 2.07 が必要ですが、政府は、独身女性が結婚して出産したいという希望が叶った場合の出生率を希望出生率と定義し、1.8 という具体的な目標を掲げています。これとて、人口減少を遅らすだけの目標でしかなく、早急に、働き方改革で、大胆な出産・育児と仕事を両立させる施策を打ち出さないと、出生率がたとえ 2 を超えても、母親となる女性の人口が減って、手遅れになります。

救いなのは、最近、患者さんの中で、「元号が新しくなるので、これを機に入籍・出産する予定です。」と言われる人が増えていることです。第三次ベビーブームとまではいかないでしょうが、少し期待して、平成最後の飄々を終わりたいと思います。